

パリ断章 1994-1995

山中哲夫

I

生きとし生けるものはすべて死ぬ。生は一瞬であり死は永遠である。われわれは一瞬を生きている。鳥も、けものも、魚も樹木もそうである。しかし彼らはわれわれと異なって、死を想わない。それは、彼らがわれわれ人類よりも数百倍も進化しているからである。蟻のヒエラルキーは進化の極致である。蟻や蜂の叡知にわれわれの叡知ははるかに及ばない。死を想うかぎり、われわれはまだ未熟である。

II

文学は死んだ。まず詩が終りを告げ、次いで小説が衰弱死した。批評が辛うじて生き残ったが、それもいまや危篤状態にある。哲学はそれよりはるか以前に消滅した。あとに残った文字だけが、主人を失った飼犬のように路頭をさ迷っている。しかしそれもやがてワープロとパソコンという犬殺しの罠にはまって、一掃されることだろう。精神の地平には何もなく、広々とした曠野がひろがっている。

III

パリ。日常が祝祭の街。樹木は限りなく美しい。しかしそこには魔物が棲んでいる。この街に三年住むと、もう人は母国に帰りたくなると言う。十年住むと、帰りたくともはや帰れなくなっている。アル中か精神病になっている。絶望と呪詛。この街の綺羅びやかさ、表面的な陽気さの

裏に隠された酷薄非情に人は気づかない。とりわけ若い日本人女性はこの魔物に唆されて、祖国を失い、親を失い、日本語を失ってゆく。自ら無国籍者として孤独に生きてゆく覚悟をもった者だけが住むべき都市。

IV

シオラン。ルーマニア生れの異端の哲学者。思想のテロリスト。破壊の貴公子。ついに爆発しなかった時限爆弾。彼の言葉の一つ一つにヨーロッパの苦悩がにじんでいる。ギリシア・ローマの伝統も、キリスト教の伝統も、民族紛争の歴史も、個人主義も持っていないわれわれ日本人には、決して体験的には理解できない存在である。シオランを持たなかったのは日本人の幸福であり、また不幸でもある。大人になれない子供の幸福と不幸にそれはよく似ている。

V

自分がこの世に生まれた使命の何たるかを知らずに生きている人は、愚かである。自分がこの世に生まれた使命を失った人は、悲惨である。前者は愚かなまま生きてゆけるが、後者はもはや生きてゆくことができない。絵を描かなくなった画家、演奏しなくなった音楽家、思想を失った哲学者、信じるものがなくなった宗教家、彼らに残された唯一の道は、自殺である。しかしそれにしても妙だ。現代において詩を書かなくなった詩人、小説を書かなくなった小説家が、そのために自殺したという話を聞かない。天職を失った者は生きてゆけないはずなのに。

VI

カイユボットが描いた、雪景色のバリの屋根の絵が好きだと言った女流ピアニスト。彼女はオテル・ド・ヴィル近くの教会でバッハの演奏会を開いた。その音楽を聞きながら、例のカイユボットの絵が思い浮んだ。日本人である彼女の、演奏しているその横顔に、言い知れぬ孤独を感じた。二

十五年間、彼女は一度も日本に帰ったことがない。わたしとの会話はフランス語を交えながらであった。日本語はもう書けないという。その代わりバッハに近づいたとも言った。

VII

ルーアンでモネの大聖堂の絵を見た。十五、六くらいの金髪の少女がその絵の前に立っていた。すらりと美しいうしろ姿をながめながら、モネの絵にはフランス人がよく似合うと思った。見入っている彼女も絵の一部に思えた。金色の長い髪、抜けるように白いその肌、細く長い足。これらはモネの青と金の色調に見事に調和していた。胴長で黒い髪の日本人がモネの絵の前に佇んでも少しも似合わない。ヨーロッパの思想もまたこれと同じか。

VIII

ストラスブール。タクシーでライン川を渡る。渡る時、橋の真ん中で車を止めて、川の兩岸をながめる。右のフランス側の公園は幾何学的にきれいに刈り込まれていて、どこにも影がない。左のドイツ側の公園は樹木や茂みを自然のままにして、影が多い。フランス精神とドイツ精神とが公園という形で向かい合っている。わずが幅数百メートルの川を挟んで、これまでどれほどの血が流されてきたことだろう。行きの立て札にはチョコレート色の地に白抜きで“Le Rhin”（ル・ラン）と書かれ、帰りの立て札には緑色の地に黄色で“Rhein”（ライン）と書かれてあった。マルクで払った帰りのタクシー代は行きの倍近くあった。絶対に相容れない二つの国を数分で往復した。

IX

サン＝ミッシェルのカラオケバーで深夜一時ごろ、日本の若者が騒いでいた。日本では決して目にしないような騒ぎ方だった。若い男女は嬌声を

あげて、踊りまわっていた。レコード係を務めるパトロンの中国人の親父さんがあきれたようにながめていた。それぞれが心の裡にさまざまな悩みを抱え、肩に重い荷を背負って騒いでいた。パリの夜は長い。騒ぎたいだけ騒げばよい。人気ない通りを車で帰り、各人が自分のアパートマンで目をさまし、なぜ自分はこんなところにいるのだろうかと自問することだろう。それまで歌いたいただけ歌えばよい。

X

RER（首都高速線）のB線で、シャトレ＝レールから乗り込んで物乞いをする若い女がいる。垢じみたジーンズをはいて、金髪は髪はボサボサで、いつも赤いヘア・バンドで無造作にとめていた。目はもの憂そうで、視線が定まらず、どこを見ているのか分からない。自分の名はマルチヌで職もなく家もなく、困っているから、いくばくかのお金を恵んでくれと言っている。しかし投げやりなその様子から、何か絶望的なものを感じた。麻薬をやっているのかもしれない。よく見ると美しい女だった。二十四、五か。あるとき、不良じみた男が彼女に何かささやいて、二人は途中のダンフェール＝ロシュローで降りた。そばの乗客がニヤニヤしていた。相変わらず気怠そうな態度で男と降りて行ったうしろ姿を、わたしはいつまでも見送っていた。

XI

相手から否定疑問で訊かれたとき、それを肯定する場合、フランス語では「ノン」と言う。初級文法に属するこの簡単なことが、実際にはなかなかできない。つい「ウィ」と答えてしまう。二、三ヶ月滞在しているうちに、何も考えずに自然に「ノン」と言えるようになったが、なぜ自分は「ノン」と言えるようになったか考えてみた。そう言えるようになったのは、自分が相手の側に立っていなかったからだ気づいた。尋ねた相手の身にならず、単に話の内容だけに集中したとき、否定疑問にたいしてとっさに

「ノン」と言えた。ここでは、言葉は単なる道具にすぎないことを痛感した。

XII

パリ植物園には初代園長で博物学者のビュッフォンが植えたプラタナスの木が立っている。パリで最古の樹木は同じ園内にあるニセアカシアの木だが、わたしはこのビュッフォンのプラタナスのほうが好きだった。フランス革命やナポレオンをながめてきたこの老木に手を触れると、木の鼓動のようなものが伝わってくるようだった。植物の域を越えて、何か精霊に近いものを感じた。パリで孤独に生きているということは、この古木のように、一人で忍耐強く立っているということなのだ。樹皮のめくれた幹を撫でてみる。石の建造物にはない温かみがあった。慈父のようだ。声をかけてみたくなった。あとで、この木が森有正が愛した木であったことを彼の著書で知った。彼も手を触れたのだろうか。

XIII

オペラ座通りの裏にラオス人がやっている日本レストランがある。観光客はあまり来ない。パリや郊外に住んでいる日本人がよく通ってくる。それは主人の人柄のためだが、またそこで店を手伝っている日本人の奥さんの優しい笑顔のせいでもある。パリに暮らしていると、こういう優しい笑みに出会うことはめったにない。特に日本人の男性客は彼女の笑みとやわらかい立居振舞いに接したいという思いに駆られて、遠くブローニュの森の外れから車を飛ばしてやってくる。日本人女性の当たりのやわらかさ、そのはにかみ、その表情の奥ゆかしさ、そして何よりその女言葉の日本語の美しさは、日本を離れてはじめて発見する類のものである。日本にいて目立たない女性ほどフランスでは際立つ。

XIV

日本人女性には日本人女性独特の美しさがあるように、韓国人女性にも中国人女性にもそれぞれ比類ない特有の美しさがある。サン＝ミッシェルのカラオケバーに働くクリスチーナはフランス国籍をもつ中国人である。中国名を「翔燕」という。ふだん話しているとフランス人と少しも変るところがない。ところが、ある夜、地下のバーに降りてゆくと、誰一人客のいないがらんとしたサロンで、クリスは所在なさそうに腕を組んで立っていた。その流れるような曲線の立ち姿に、わたしは唐三彩の姑娘（クーニャン）の立像を見たように思った。日本人とは異なる、中国人独特の立ち姿のように映った。わたしは彼女に古えの女人像を見た。

XV

フランス大統領選。保守党のバラデュールが圧倒的に優位に立っていたのが、年の暮れになるとスキャンダルによって大きく後退し、代りにパリ市長のシラクが浮上してきた。ところが翌年の春の中間選挙では社会党のジョスパンが第一位となった。そのジョスパンもスキャンダルによって足を引っ張られ、五月の本選挙では結局シラクがフランス大統領となった。パリっ子にもっとも人気のないパリ市長が。それも辛うじて過半数に達した得票数によって。フランスの選挙は常に接戦になる。さまざまな権謀術数がめぐらされる。故ミッテランはその達人だった。

XVI

小雨の夕方、コレージュ・ド・フランスで日本の有名な文芸評論家による講演を聞いた。彼は万葉から俳句に至る日本の伝統的詩歌の歴史について語った。達者なフランス語だった。講演後、隣にすわっているフランス人に、あなたも蟬の鳴き声に静けさを感じるかと尋ねてみた。彼は、自分は南仏出身だが、南仏でも蟬が鳴いていて、同じように静けさを感じると答えた。南仏の蟬の鳴き声は機械的で、日本の蟬のように鳴かないが、

この彼の答えをわたしは面白く思った。日本的なものは外国人には理解できない、というのは偏見にすぎない。ニュアンスは伝わらないまでも、彼らは彼らなりにちゃんと理解しているのである。

XVII

シテ島の尖端、セーヌ川とすれすれのところにある三角地帯の公園「ヴェール・ギャラン」——このさらに尖端にある柳の木が、パリの樹木の中で一番最初に芽を出す。まだ黒々とした枯枝が並ぶ河畔の中で、真っ先にここがうす緑いろを帯びる。パリの春の訪れである。灰色の空との別れである。ホッとする。ここはまた恋人たちの憩いの場でもある。樹木に囲まれ、水音がすぐそばに聞える、親密な空間である。若い男女が愛し合う秘密の場所だが、また絶望した者が身を投げるところでもある。身近に聞える水音が人を死に誘い込むのだろう。

XVIII

パリはフランスではない。フランスの都市はマルセイユであり、リヨンである。パリはパリであり、パリ以外の何ものでもない。ここはフランスではない。国籍不明の都市である。国籍不明者が群衆に紛れて隠れ住むに絶好の場所である。精神上的の国籍不明者もまた。

XIX

明け方、ゴミ収集車が空き瓶を回収しているのをアパートマンの窓からながめる。ガラス瓶が溜まった緑色のプラスチック製のゴミ箱を高々と吊し上げ、底を抜く。凄まじい音を立てて大量の空き瓶が落ちてゆく。そのほとんどがアルコール飲料の瓶である。こちらではアルミ缶など使わず、ガラスを使う。瓶もコップも。道端のいたるところに粉々に砕けたガラスの破片が散乱している。明け方に聞くこのガラスの碎ける音に、おぞましさを感じた。この街には酒を飲むしかない人間がどれほどたくさんいるこ

とだろう。

XX

相手との距離がどの程度あるかは握手の仕方で見える。こちらの差し出した手に、笑顔で応えても、その手のひらに真心が感じられないときがある。そういうときの相手の手のひらは冷たい。女性はたいてい指を揃えてそっと差し出すだけで、握るということはない。これは礼儀の部類に属する。一年余りのフランス滞在を終えて、シャルル・ド・ゴール空港から帰国するとき、わたしの古くからの友人はわたしの手をしっかり握りしめ、ゲートに向かうわたしたちに、両手を高く振って別れを惜しんでくれた。

XXI

セーヌ川に落ちる夕陽をもっとも美しく見ることのできる橋は、おそらくルーヴル美術館の前にかかる鉄の橋「ポン・デ・ザール」だろう。晴れた秋の夕暮れどき、パリっ子たちがこの夕陽をながめに三三五五集まってくる。手回しオルガンがハンガリア風の音楽を奏でている。画架を立てて風景画を描いている人もいる。わたしがもっとも惹かれたのは、あたりの静けさだった。広々とした右岸にルーヴル宮、サマリテーヌ、サラ・ベルナール劇場が見える。どれも古色を帯びた歴史的な建物である。そのときふと、明治の頃の東京はこんな静けさであったのではあるまいかと考えた。

XXII

パリ滞在の経験を持つ友人によると、パリに住む日本人には勝ち組と負け組の二種類があるという。なるほどそうかもしれない。勝ち組は西の十六区に住み、フランス人とは付き合いわず、早く帰国することを願っている。負け組は反対側の東の二十区に住み、他の日本人とは付き合いわず、帰国を拒んでいる。勝ち組には将来が約束され、負け組には居場所がない。しかし慣れない異国に住む勝ち組の奥さんたちはノイローゼになり、アパルト

マンから身を投げたりする。負け組の奥さんたちは、近所の中国人やヴェトナム人たちと楽しくパーティーをひらいたりする。いろんな勝ち方があり、いろんな負け方がある。

XXIII

冬から春へ。サマリテーヌの赤と緑の三角旗が逆方向になびきはじめ、サン＝ジェルマン＝デ＝プレ界隈のショーウィンドーの婦人服も黒からピンクの春物に衣替えし、連翹が咲き、サクレ・クール寺院の前庭にたくさんのラッパ水仙が咲き乱れるようになる。涸れていた広場の噴水盤に水が戻ってきて、見上げれば、エッフェル塔に浮ぶ雲も、やわらかな春の雲。曇った午後でも、冬より明るい。やがてマロニエヤリラの花が咲く。サクランボの季節。観光客が少なくなり、パリは日常を取り戻す。カフェにすわっていても明るい気分になる。物乞いも浮浪者も子供のジブシーも酔っ払いも見かけなくなり、長い冬の夢からさめた気持になる。

XXIV

デファンスのカフェテラスで食事していると、店の中に雀が入ってきて、足元のパン屑をつつきはじめた。やがて丸テーブルの上にちょこんと飛び乗って、また餌をあさりはじめた。フランスの雀は人間を恐れない。肩にとまることさえある。ヨーロッパでは生きものを大切にするから、という理由ばかりではない。主食の関係でもある。フランスパンは皮を食べ、まずい中身は雀や水鳥にあたえる。麦の国で雀は平安に暮らせる。日本人は米を主食にしている。稲穂にとって雀は害鳥である。焼いて食べる習慣すらある。日本の雀は決して人に馴れない。公園のベンチで失業している若者が雀にパンをあたえている。そこには何か一体感のようなものがある。そういった一体感は日本にはない。なくて幸せなのかもしれない。

XXV

夜のモンマルトル。画家のアトリエ。物騒な裏町をワインを抱えて訪れる。街灯が照らし出す灰色のアパルトマンの入口に立って、六階の窓に呼びかける。画家が首を出す。彼は窓から何かを落とす。それは一瞬パッと白い花びらのように開いて、わたしの手の中に落ちた。ハンカチで結んだ部屋の鍵だった。この鍵を使って扉を開け、螺旋階段をきしませながら登っていったが、それにしても、夜空から舞い落ちる白い花は忘れ難かった。夜のモンマルトルであったことがいっそう印象を強くした。ルノワールやユトリロが住んでいた町である。

XXVI

ベルナール。十一年前南仏モンプリエで日本語を教えたフランス人青年。そのときはアメリカの大学生だったが、オデオン広場で再会したときは、腹が少々出て壮年に近くなっていた。例によって失業していた。アイルランド人女性と同棲していて、部屋は別の女友だちと共有していた。恋人は被害妄想のヒステリー患者のようで、一晚中寝かせてくれないとわたしにこぼした。彼はパリ中を歩く。左岸から徒歩で右岸のオペラ座へゆき、また歩いてオルセー近くの自宅まで帰る。早足の彼についてゆくのが精一杯だった。今度はオーストラリアへ行くという。恋人は捨ててゆくと言った。父親が亡くなって、母親は半狂乱だという。昔、妊娠中のわたしの妻を看病してくれた優しい人だった。

XXVII

子供と犬にたいするフランス人の嫉は厳しい。体罰は当たり前のようにして行われる。「わたしの目を見なさい！」顔をそらしている女の子に母親が叱る。もっと幼い子が石畳の上で転んでいやというほど額を打つ。両親は笑って、「何を拾った？」と訊く。子供は泣かない。親と子供との間には距離がある。小学生までは必ず親が送り迎えする。それは甘やかして

はなく、犯罪から身を守るためだ。公共の場で騒ぐ子供も犬もこの国にはいない。吠える犬は轡をはめられる。甘えん坊の子供はこの国では生きてゆけない。犬も子供も見事に社会化されている。あるいは去勢されている。その反動が、親となったときの幼児虐待であり、犬の糖尿病である。

XXVIII

フランス人のエレガントな冷淡さ。これはパリだけのことかもしれないが。地下鉄やバスの中でちょっと肩が触れただけでも「パルドン」と謝る。こちらが足を踏んだのに、踏まれた相手が笑って「パルドン」と言う。この笑顔と言葉には、あなたは他人である、他人のあなたは馴々しくわたしのからだに触れてはいけない、という意味が暗に含まれている。マドリッドで、地図をひろげて道を尋ねるわたしに、からだに触れんばかりに近づいて親切に教えてくれた若い女子学生のことを思い出す。自分の胸や肩が相手に触れても平気であった彼女に、わたしは南国の人を思った。パリでは絶対にこんなことはない。検礼にきた車掌が乗客と長話をするということも。また見知らぬ乗客同士が談笑するということも。

XXIX

相手を見つめる。相手の目を見つめて話をする。相手は同じまなざしで応えてくれる。これはフランス人である。日本人だとこうはいかない。目をそらして顔を赤らめる。表情ばかりではない。態度にも優柔不断さや自信のなさが表われる。なぜあなたはいつもペコペコするの、と日本人の夫をフランス人の妻がなじる。日本の社会では客の顔を直視したり、胸を張ったりしてはいけない。横柄だと見られてしまうからだ。ヨーロッパでは逆に腰が低いと卑屈だと見られる。軽んじられる。意見をもたない人間は、そこに存在していないのと同じだ。笑ってごまかしてはいけない。正面から衝突しないと相手とはうまくいかない。争って、和解するのだ。

XXX

「ボンジュール」よりも「ボンジュール、ムッシュー」のほうが丁寧な表現だが、距離がある。丁寧であるほど距離がひろがる。これは日本語も同じ。しかしフランスで、東洋人がフランス人に、あるいはフランス人が東洋人に言う場合、そこには人種的なニュアンスがこめられる。二十五年パリに住む友人は行きつけのカフェやレストランを出るとき、必ず「オヴァー、ムッシュー」「メルシー、ムッシュー」と「ムッシュー」をつける。長い間、人種的偏見を受けてきた東洋人である彼の、フランス人社会にたいするスタンスの取り方がこれであった。どんなに親しくなっても、決して心を許さない。相手も同じ。アラブ人が経営しているコピー屋で、黒い部分がまったく写らなくて出てきた紙を見て、女主人が「ラシスト！」（人種差別主義者！）と毒づいたのを思い出す。

XXXI

日本では物事が決定するのに時間がかかる。組織と規則で動いているからだ。が、いったん決定すると実行は早い。フランスでは物事の決定は早い。が、なかなか実行しない。直接の担当者が「ウイ」と言えばすぐ決定する。しかしその実現には一年以上かかることも稀ではない。下水溝や電気配線の工事といった日常生活上の問題でも同じ。だからたいていのことは自分でやってしまう。そのほうが早い。ところが部品が見つからない。浴槽の栓一つ合うものが簡単に見つからない。苦勞して探して買ってきたばかりの姿見を子供が割ってしまい、それで同じところに買いに行くと、もうない、いつ入荷するか分からない、という。結局、同じものを、わたしはバルセローナのスーパーで見つける羽目になった。

XXXII

ヨーロッパ人は肉食の騎馬民族である。愛情関係においてわれわれよりはるかにアグレッシヴであり、食生活においてはずっとエネルギーで

ある。肉食と愛憎の激しさとの間には何か関係がありそうだ。車の運転は荒い。バスや地下鉄で急ブレーキ、急発進、急カーブは当たり前。車は猛スピードで走り、黄信号で急停車する。しかし運転はうまい。騎馬民族の伝統か。小さな広場の中央によく像が立っているが、たいていは騎馬像である。片足をあげた馬に跨がった偉人はもっとも偉人らしく見える。ただ立っているだけではさまにならない、たとえダントンであっても。肉食の騎馬民族の子孫である彼らの行動力と食生活に、草食の農耕民族の子孫であるわれわれはとても太刀打ちできない。

XXXIII

思想は胃袋の問題である。デカルト的合理精神も懐疑主義も、あるいはサルトルの実存もラカンの精神分析も、健啖家でなければ十分に消化することはできない。精神上の健啖家は、日常生活においても健啖家でなければならない。胃弱や栄養不良の思想家は、この国では力を発揮することができない。文学然り。「微熱文学」など彼らには到底理解できないものだろう。たくさん食べ、多くの言葉を吐き、文字を書き散らす。数は力である。優れた思想家や文学者はまた膨大な手紙や日記の書き手でもあった。胃が強くなければこんなに書けはしない。ブルーストだけは例外だったが。

XXXIV

外からは分からないが、アパルトマンの扉を開けてうす暗い通路を少しゆくと、四角い中庭がある。四壁には裏窓がならんでいて、台所や洗面所や寝室の一部が見えたりする。つまり建物は口の字型に作られていて、この陽の当たらないひんやりと湿った空間にも植木や花が植えられているが、表通りに面した窓辺の花と異なって、生気がなく、陰気臭い。見上げると四角い空が小さく見える。ボードレールが呪った空だ。この四角い空を鳩が横切ってゆくことがある。そのときだけ空が明るく見える。鳩の行方に南国の空があるような錯覚をおぼえる。冬にはこの空から雪が舞い落

ちてくる。石畳はどこよりも冷たく凍てつく。

XXXV

周知の通り、ここは靴で生活する国である。ベッドに横たわるまで靴を脱がない。往来がそのまま家の中までつづいている。ところが、往来と家の間には厳重な扉がある。扉は多く二重になっていて、何ヶ所も鍵がかけである。管理人が見張っていたりする。日本では家に入るとき履物を脱ぐ。往来と家とが仕切られている。ところがそれにもかかわらず、玄関には鍵をかけず、窓が開いていたり、勝手口から御用聞きがきたりする。これはどういうことなのだろう。日本では公の意識は薄く、私的なものは無防備に外に晒されているのにたいして、ここでは、私的なものはベッドに入るまで守られている、いや、ベッドに入っても。

XXXVI

T女史——海外生活の経験が豊富で国際感覚を身につけた人。およそ人種的偏見とは無縁な人である。現在、彼女はパリ大学で日本語を教えている。ある夜、彼女と韓国人女性と三人で韓国レストランに入ったことがある。日本語の達者なその店の主人は、植民地時代に日本に住んだ経験がある。その主人がしきりに日本料理と韓国料理の比較をし、韓国料理が日本料理のルーツであること、あらゆる点で韓国料理のほうが優れていることを力説した。するとT女史は韓国料理優位説に真っ向から反対し、熱心に日本料理の独自性、優位性を説いた。日本料理のルーツが韓国料理であることが我慢できないといった口吻だった。むきになった彼女の態度を興味深く思った。あの彼女が、である。

XXXVII

キスについて。カフェで目の前に若い日本人の男女が向かい合ってすわっている。テーブルをはさんで話していたが、やがてたがいに顔を近づけ

て、キスをした。パリならではの光景だった。パリだからできるのだろう。微笑ましい光景だったが、それでもどこかぎこちなかった。ラテン系のフランス人は口唇性格で、街角でもよくキスをする。その光景が少しも汚らしくないのは、キスがコミュニケーションの一部になっているからである。会話の延長がキスである。日本人が往来でキスをする姿がどこかいかかわしく見えるのは、従来キスが性行為の前戯になっていたからだ。キスがセックスの導入部である以上、公然とやるのは憚られる。セックスから会話へとキスが変わればよい。

XXXVIII

エクサン＝プロヴァンス、ベルピニャンと南仏を旅行して一週間後にパリに戻ってくると、地下鉄のポスターが全部新しいものに貼り替えられていた。一週間ぶりに見るパリは以前とは違って見えた。大都会は日々様相を新たにしている。いや、そうではない。南仏の空気を吸い、自然を満喫し、田舎の人たちの人柄に接して戻ってきた、こちらの精神状態がやや変わったからだ。異常な生活を当たり前と思いはじめたこちらの精神が歪んでいただけの話だ。健全な生活に触れて、それまでの不健全な生活を見直すことができるようになったためだ。しかしそれでも、わたしはパリに惹かれる。不実で残酷な、しかし妖しい魔力をもった美女に魅了されるようなものだ。傷つけられてもなお惹かれてゆく。

XXXIX

サン＝ミッシェル界隈のレストランに、白髪まじりの長い髪をうしろで束ねて髭を生やした初老の男がよく入ってくる。彼は無言で客のいるテーブルに紙切れを置いてまわる。紙切れには、自分は耳が聞えず口がきけない、お恵みを、と書いてある。しばらくして彼は紙切れを回収する。金が添えられていることはあまりない。ダンフェール＝ロシュローのホーム上がり口の階段に、中年の女性が悲しげな顔をして、幼い女の子の写真を貼

った段ボール紙を立ててすわっている。行方不明の子供を捜しているのだが、いなくなってもうずいぶん経っている。女の子の姿形は変っているだろうに、昔の写真を掲げずと同じようにすわりつづけている。顔見知りの婦人が何か話しかけている。地下鉄六番線では「わたしは病氣です！」と元気よく紙切れを読み上げる太ったおばさんがいる。「プチット・ピエス！」（小銭を！）と言うと、誰かが「紙幣を要求しろ」と茶化す。まわりの乗客が笑う。昔の物乞いは芸をして金をもらった。陽気だった。パリは暗くなった。

XL

パリ名物の焼き栗はすっかりアラブ人の商売になってしまったが、五月一日スズランの日のスズラン売りも最近ではアラブ人たちが横取りしてしまったようだ。しかしアラブとスズランはどう見ても不釣合だ。深く静かな森としっかりとした朝露が似合うこの花は、紛うかたなきヨーロッパの花である。ニオイスマレとスズラン、この二つの花だけはイギリス人とフランス人に残しておきたい。紅茶とカフェを彼らに残しておきたいように。

XLI

ヨーロッパの北の街には時計鐘があり、南の街には日時計がある。北では音楽が鳴り、人形が動く。南ではただ静かに影が時を刻む。パリには何もない。時を刻むものが何もない。たとえあっても、誰一人として見上げる者はいないだろう。秋深い頃、あの鈴懸の並木の、高いところに懸かった実の美しいシルウェットさえ誰も見上げないのだから。いや、時計塔などいらない。パリでは鈴懸とマロニエが時の流れを教えてくれる。若葉、青葉、黄色く色づいた秋の枯葉、落葉そして枯枝。どの季節も美しい。この街で美しいのは建物と樹木だけと言ってもよいくらいだ。それらは時のうつろいと、変わらない堅牢さを同時に表わしている。

XLII

前世紀末にエッフェル塔が出現したときのスキャンダルは、規模は違いますが、少し前にルーヴル宮の中庭にガラスのピラミッドが出現したときのスキャンダルに似たものがあつたろう。どちらも、醜い、パリにマッチしない、と人が騒いだ。ところが「醜悪なる骸骨」はやがて「鉄の貴婦人」と呼ばれるようになった。エッフェル塔は確かに美しい。それはエッフェル自身が語った「機能美」のせいばかりではない。周囲が広々として視界が開け、水と緑に縁取られているからである。ルーヴル美術館のガラスの入口が美しいのは、古代エジプトの建造物をわれわれに喚起するからである。鉄の塔もガラスの入口も三角形の立方体である。これは現代のわれわれに何か古代の夢のようなものを抱かせる形ではあるまいか。霊峰富士のように。

XLIII

窓辺の天使。友人の画家がモンパルナスで個展を開く。スタンドグラスに白い天使が現われた絵を買う。知人の屋根裏部屋に泊まったことがある。三角窓の向こうは、屋根また屋根、林立する煙突そして空。不思議に落ち着いた気持になる。窓辺を天使が訪れても少しも不自然ではない気分になった。カルパッチョからシャガールに至るまで天使の訪れを描いた絵は多いが、やはり天使は窓ガラスの向こうに現われるのがもっとも天使らしい。それはおそらく教会のスタンドグラスのイメージが強いためだろうが、そればかりでなく、パリの屋根裏部屋の窓から空をながめていると、いつしか人は天使の幻を見るように思われてくるからだ。そこは天国に一番近いところ。あるいは死に。

XLIV

サン＝ジェルマン＝デ＝プレ教会でバッハのオルガン演奏を聞く。近く
の壁に貼られた演奏案内ポスターの余白に、太い文字で黒々と「神は死ん

だ！」と落書きされていた。しかしバッハの中には神が生きていた。神が存在していた頃の時代がよみがえった。確かに神は存在していた。音楽の中に。生や死が神の領分であった時代をわたしは懐かしんだ。孤独ですら神の掌中にあるものであった。孤独や自殺は人間の思い上がりに他ならなかった。すべては祈りによって解決された。——バッハの音楽が終わった。音楽とともに神は去っていった。

XLV

T女史から聞いた話。彼女は個人的に三十歳くらいのある女性に日本語を教えている。その女性の住む場所はいかがわしいところであって、その部屋は閉め切っていて日中でも暗く、蠟燭をともしている。部屋の中は乱雑で汚い。この女性には異常な学習能力があって、現在博士論文を準備中だが、何年も前からやっけていながら一向にもものになっていない。異常なほどの完璧主義者で、妄想を抱いている。T女史の来訪だけが唯一の外界との接触の機会であるという。来訪しないとひどい嫉妬を起こす。話を聞いて、その女性は精神分裂病者だと思った。早く関係を絶ったほうがよいと進言したが、T女史は気味悪がりながらも好奇心を抱いている様子だった。パリにはよくこういう人がいる。

XLVI

冬の夜。シテ島の地下のスタジオで自主制作映画の吹き込みをやった。ミキサージュが終って、依頼主の韓国人女性キムさんとセーヌ河畔を歩きながら話をした。御多分にもれず彼女は日本の三大巨匠にオズ、クロサワ、ミゾグチをあげた。なぜ外国人が溝口健二をそれほど評価するのか、わたしには分からなかった。彼女は映像がきれいだと言った。しかしそれは『雨月物語』だけのことだろう。『楊貴妃』などは完全な失敗作だ。人づてに聞いたところでは、彼女の姉は両親の反対を押し切って日本人学生と結婚したが、彼女の日本人男性との結婚は認めてもらえず、フランスに逃れて、

年寄りのフランス人画家と結婚したけれども、家には寄りつかず、ぶらぶらしているという。両親への当てつけで結婚したのだろう。深夜、タクシーを降りた路地裏で、小さな野良犬をしゃがんで撫でていたうしろ姿が忘れられない。

XLVII

レ・アール近くのアパルトマンの一室で、映画人たちの小さなパーティーがあった。そこで、韓国の映画雑誌に記事を載せている映画評論家の若い韓国女性を紹介された。高校までは大学教授である父親とニューヨークに住み、大学は名門の梨花女子大を出て、文学研究をやっていたが、いまはパリに住み、評論活動をしているという。彼女は星座と運命のことを語った。運命は自分で切り開くものだと言った。彼女は四柱推命学に凝っていて、それによると、彼女の運命は衰運の連続で、若死にするとなっていた。「わたしは自分の運命と闘う」髪が豊かで美しい彼女の笑顔は、まったく屈託がなかった。その立居振舞いには男を寄せつけない毅然としたものがあつた。フランス人と踊っている姿をながめながら、運勢が当たらないことを祈った。

XLVIII

モンソーリ公園。パリでもっとも好きな公園の一つ。起伏が多く、道が曲がりくねり、突然視界がひらけ、いちめんに芝生と花壇が広がる。いわゆるイギリス式風景庭園。滝が落ち、大きな池には水鳥が遊ぶ。このように水辺が身近に感じられる公園は少ない。それも自然のままの状態で。十四区の東の外れにあるこの公園には外国人も多い。東洋人の姿もよく見かける。全体の雰囲気が優しげで親しみをおぼえる。映画『五時から七時のクレオ』の舞台となった公園である。そばを21番のバスが走る。サン＝ミッシェル、リヴォリ、オペラを通るバスである。春から夏にかけて夕食後、いつも家族で散歩した公園。妻はこの公園そばのアパルトマンに住み

たいと言った。娘は水鳥に食べ残しのパンをしきりにやっている。特に曇った日に懐かしさがいや増した。

XLIX

十三区には中国人街がある。インドシナ戦争のさい大量の難民がフランスに流れ込んできて、政府は十三区に高層アパートを建て、そこに難民を収容した。これが現在の中国人街のはじまりである。中国人のほかにはヴェトナム人、ラオス人、カンボジア人などが多く住んでいる。ここには彼らの銀行があり、スーパーがある。その最大のスーパー陳氏の売場には、警備員が目を光らせている。客はすべて泥棒といった目つき。売場は一方通行になっていて、いったんレジを出ると引き返せない。知らずに逆行していると、警備員から呼びとめられ、スーパー袋の中を見せろと言われる。中を見せ、レシートを見せて、ようやく解放される。別のスーパーに入るときは、前の店で買った品物は一時預かり所に預けなければならない。万引き防止である。レジには偽札の二百フラン紙幣のモデルが貼りつけてあった。

L

わたしの友人は日本のある新聞社の現地販売の責任者を務めている。日本からやってくる特派員と現地のフランス人販売員との橋渡し役である。あるとき、日本人とフランス人とで打ち上げ会をやった。二次会で日本人だけとなったとき、ある一人が「やっぱり外国人がいないのはいいですね」と言った。それを聞いて、友人は、何を言ってるんだ、お前たちのほうこそ外国人じゃないか、と思ったそうだ。日本人社会の中だけで暮らしているからこういった言葉が出てくるのだろう。それをとがめた友人のほうが正しいが、彼は日本人よりも他の東洋人たちと多く付き合っている。ここに、日本人に戻れず、さりとてフランス人にもなり切れず、外国人ではない外国人として暮らしている彼の微妙な立場がよく表われている。彼のフ

ランス語には恨みがこもっている。

LI

日本大使館に行っても日本人会に行ってもいつも同じことを感じるのだが、どうして対応に出た受付の女性はあんなにヒステリックなのだろう。神経をいらだたせ、ビリビリしている。パリの区役所の女性係員は木で鼻をくくったように冷淡で横柄だが、いらだつということはなかった。常日頃、切羽詰まって相談にくる日本人を相手にしているからなのだろうか。それとも、彼女たち自身が異国の生活で切羽詰まっているのだろうか。特にそれがひどいのが日本人会の教育相談だが、しかしこれは仕方ないかもしれない。言葉の通じない異国での子供の教育、深刻にならざるを得ない。ヒステリックになるのも無理はない。日本人学校の子供たちは帰国後のいじめを恐れ、フランス人学校に入った子供たちは日本語を忘れてゆく。バイリンガルは失敗することが多い。国際結婚と同じく。

LII

阪神大震災でフランス政府の援助の申し出を日本政府が断ったのがフランス人にはどうしても理解できないという。救助犬だけを受け入れると聞いて、フランス人は犬並みかと怒ったそう。言葉が通じない、衣食住その他習慣が違う、そういった点が受け入れの障害となっているとしたら笑止なことだ。派遣される隊員はアフリカの砂漠でもアルプスの山中でも活躍したその道のプロである。客ではない。彼らはどこにいても立派に任務を遂行できる。こういったところにも、日本人の外国人嫌い（特に西欧人にたいする）コンプレックスが表われている。震災が報じられたとき、わたしは周囲のフランス人や他の外国人たちから家族の安否を尋ねられた。オペラ座通りに行くと、のんきな顔をして日本人観光客が買物をしていった。震災を知っていたにもかかわらず。関西訛だった。

LIII

子供の自殺について。ル・モンド紙の第一面に西尾市での子供の自殺のことが報じられていた。それで、知り合いのフランス人から何度か質問を受けるはめになった——「いじめられてなぜ自殺するのか」これが彼らには謎であった。いじめはフランス人社会にもある。学校での暴力は常に社会問題となっている。しかしいじめられて死ぬ子供は皆無である。身の危険は自ら防ぐことを幼い頃から教え込まれているからだ。命の危険に晒されたとき、相手を傷つけるのもやむを得ないこととされている。そうでなければ、この国では命がいくらあっても足りない。日本の場合は親と子供のマゾヒズム的癒着が問題なのだが、とりあえずわたしは分からないと答えておいた。ともかく、自殺に追いやった者を犯罪者にはいけない。

LIV

サン＝ミッシェル広場の東の角にあるカフェ“Le Départ Saint-Michel”。午後十時。セヌ川の向こうに橙色の照明を浴びてノートル＝ダム寺院が浮び上がっている。特徴的な二つの角塔が夜空にそびえている。バトー・ムーシュ（遊覧船）が通る。対岸のアパルトマンの白壁に、巨大な並木の影が次々に浮び、流れ、消え去る。光の船の通ったあとは、いっそう夜の静寂が深まる。このカフェは、かつて森有正が家族と別れることを決意したカフェである。そのときと同じ変らぬ姿でノートル＝ダム寺院が浮び上がっている。彼は家族よりも、このカテドラルを選んだのだ。その気持も分からないではない。そういう気持にさせるものがあの建物にはある。サン＝シュルピス教会もサン＝ジェルマン＝デ＝ブレ教会もあの中世のゴシック建築の魅力には遠く及ばない。「ノートル＝ダムは建築物ではない。あれは一個の人格なのだ。」（クローデル）

LV

フランスの田園風景の美しさはつとに有名だが、どうしてあれほど美し

いのか不思議である。わたしなりに考えてみた。まず、公園の芝生の色と同じように、緑の色が深い。緑は風景の基調となる色である。さらに、電信柱と電線がない。広告看板がない。人工的なものが何もなく、自然だけがそこにある。しかし自然そのままではなく、まるで計算され尽くした抽象絵画のような幾何学模様で配置されて、見事に調和した空間を形作っている。その色調は毛の深い絨毯か純毛のセーターを思わせる。しかしそれだけではまだあの美しさを説明するには不十分である。日本に戻って気がついたのだが、日本では植物の種類が多い。温帯と亜熱帯とが同居しているからだが、これに反して、フランスは植物の種類が少ない。統一された田園風景の美しさの一因には、この種類の少なさがあるのではないだろうか。

LVI

オペラ座通りで男性と連れ立って歩いているT女史に偶然出会う。「パリはせまいわね」彼女はきまり悪そうに笑った。確かにパリはせまい。ここでは意外な人と遭遇する。日本でもめったに会えない人によく出会う。十年ぶり、二十年ぶりの再会すら稀ではない。そういうとき、相手は幻でも見たような顔をする。人間関係の縮図のような街。観光客として、研究者として、特派員として、駐在員として、新婚旅行で、また講演で、あるいは単なる一時休暇を過ごすために、たくさんの知り合いがパリに集まる。また日本にいてはとうてい知り合えそうもない人と気楽に言葉を交わせるのもパリならではだ。日本レストランで隣にすわった国連大使、パーティーで談笑した将棋の羽生名人、NHKの特派員。友人から借りた台湾製の電気ガマは青野聰が使っていたものである。パリは東京と直結している。

LVII

英語で「十字架」という意味の日本名をもつ友人の画家。彼はいつもソフト帽をかぶって現われる。ソフト帽の内側の折り返しには手紙が入って

いることもある。個展の招待状であったり、画商からの依頼状であったり。ある日、オルセー美術館のホイッスラー展で偶然彼と出くわした。群衆にもまれているうち、彼と肩が触れ合ったのだ。美術館を出て、セーヌ河畔のブラスリーに入って、彼はわたしの知らない飲み物を注文した。わたしたちはひとしきりホイッスラーについて語り合った。店は百年前からつづいている老舗である。そのあたりの席にホイッスラー自身がすわっていても少しもおかしくはなかった。画家が生きた町にいて、そのたまたまいは百年前と少しも変わらず、その絵を見る、その絵について現代の画家と語る、なんという贅沢だろう。

LVIII

デファンス地区の^{グラン・ダルシュ}新凱旋門前の広場で揃いの法被を着た日本人たちが日本物産展を開いていた。例によって太鼓を打ち、お茶や樽酒をふるまって、呼び込みをやっている。物珍しそうにフランス人や外国人観光客が集まっていた。物産展が終り、シャンシャンと手を打って皆いっせいに法被を脱いだ。ところが法被を脱いでもなお同じ服装だった。灰色のズボンに白ワイシャツ、そして地味なネクタイ。一人の例外もなく。法被の下にもう一つの制服があった。わたしは苦笑した。日本人のコンフォルミズム（画一主義）の粋をここに見たように思った。てんで勝手ばらばらの服装で働いているフランス人の姿を見慣れている目には、日本では少しも不自然とは思わないこの風景が異様に映った。法被も異様、その下に着ている同一の服装はもっと異様。群れているその姿は蟻か蜂のようだ。

LIX

毎週水曜日、わたしはパリの東南のクレティユにあるパリ第十二大学に通っている。ドーメニルで地下鉄八番線に乗り換え、セーヌ川の支流を越えて、パリ市の外に出る。空気が一変する。観光客の姿はまったくない。昔から住んでいる外国人嫌いのフランス人と、最近とみに増えた移民だけ

の街となる。もちろん日本人の姿はどこにもない。その八番線の車内で、日本人の母子を見た。母親はまだ若く、幼い男の子を叱っていたが、いかにも日本人の母親らしい困惑したような叱り方だった。子供は混血ではない。身なりはきちんとしていた。こういった母子はふつうは西の外れの十六区かブローニュあたりに住んでいるものだが、どうしてこんな辺鄙なクレテイユあたりの路線に乗っているのだろう。クレテイユには日本人は一人も住んでいない。この母子はどこへ行くのか。どこに住んでいるのか。父親は何をしているのか。気になって仕方なかった。

LX

トロカデロの人類博物館に行く。フランスがいかにアフリカと深い繋がりをもっているかがよく分かる。東洋の民族資料ももちろんあるが、もっとも充実しているのはアフリカのそれである。呪術に使う仮面、衣装、楽器、農耕器具そのほか日常生活のあらゆる面から珍しい資料がたくさん集められている。芸術、文学においてもアフリカの影響は計り知れない。ピカソのキュビズムやカミュの存在は言うに及ばない。現にこの博物館前の広場では、あざやかな民族衣装をまとって、アフリカ人たちが太鼓を打ち、踊っているし、ラジオの音楽番組ではよくアフリカの音楽が流され、アフリカ文学が店頭で飾られている。わたしの部屋を掃除にくるマリアンヌはセネガル出身の女性である。フランスの植民地政策は常に難民問題と爆弾テロに直面してきたが、同時にフランス人に新たな活力もあたえてきた。原色の形と音と文字とが、フランス人の感性を刺激し、彼らの知性を深めたのも事実である。

LXI

パリにきて最初に見た映画は、ゾラの小説を映画化した『ジェルミナル』だった。地下水の滴る暗い坑道と石炭にまみれた坑夫たちを見ていて、これはどこかで見た光景だと思ったが、どこで見たのか思い出せなかった。

ゾラらしい陰惨な結末であった。映画館を出て、外の日光に目がくらむあの懐かしい感覚をパリで味わいながら、地下鉄の階段を降りて行った。階段を降りながら、先ほど見たあの坑道の光景は、いま降りているこのパリの地下鉄の構内に似ている、と思いが当たった。赤茶けたしみに汚れた白いタイル張りの壁からにじみ出る地下水、うす暗い通路、酔っ払いのアルコールとアンモニアの臭い、人々の暗い目、低くアーチ型になった線路の天井、トロッコならぬ電車がライトを光らせて構内に入っている。地底の人々。出口なき通路。われわれの未来。

LXII

子供のいない夫婦は最初からもう老後だ、とある知人は言った。人生の節目節目は子供の成長とともにやってくる。子供のいない家庭にはこの節目がない。いつまでもどこまでも平坦につづく人生の道。夫婦の間に何事かあっても、それは過去・現在・未来というパースペクティブをもったものではない。常に点であり、線にはならない。親が死んだとき、親と共有していた自分の過去も死んだ、とわたしは感じた。しかしまた同時に、自分に子供がいたことの有難さを思い知った。親とともに過去は死んだが、子供とともに未来が残された。夫婦というこの現在は、親という過去と、子供という未来の真ん中に立っている。子供のいない夫婦にはこの展望がない。しかし子供を失った夫婦よりは幸せかもしれない。子供を失った夫婦は、あるべき未来が突然断ち切れ、現在という絶壁に佇んでいるのだから。

LXIII

ヴェルレーヌの墓に詣でる。彼の墓は北の外れの墓地パチニョルの一角にある。パール・ラシェーズのような有名な墓地ではない。墓守りに詩人の墓のありかを尋ねたが知らないという。あの男なら知っている、と教えてくれたのが、墓地の入口近くで商売している花屋だった。彼に教えても

らい、ついでに鉢植えを一つ買って、ようやくヴェルレーヌの墓を見つけ出した。個人の墓ではなく累代の墓で、浅い屋根型になった石の蓋に刻まれた文字も、長年風雨に晒されてボロボロになっていた。辛うじて、『ポール・ヴェルレーヌ1844-1896』の墓碑銘が読み取れた。墓の真上には高架の首都高速道路が走っており、喧しくて仕方がない。詩人もおちおち眠ってはられまい。以前に誰かが供えたらしく、枯れた植木鉢がころがっていた。それを片づけて、新しい鉢を供えた。パール・ラシェーズの、黒耀石が輝くブルーストの金文字の入った墓石とはなんといい違いだろう。ブルーストの墓は薔薇で飾られていた。生前のヴェルレーヌは決して恵まれていたとは言えなかった。波瀾万丈の生涯を送り、死しては、埃と騒音の中で忘れられている。詩人という存在そのものの悲しさを思った。

LXIV

友人夫妻と三人でサン＝ドニの裏手の十八区を歩いた日曜日の朝のことはいまでも忘れない。冷たい小雨が降っていた。雨に濡れながら黙々と歩いた。「雨に濡れるのは嫌い？」友人が訊いた。「最近のパリの雨は重たくなってね」わたしたちは地下鉄のシャトー・ルージュあたりに来ていた。車も人影もない路地であった。汚い壁にアラブの落書きが雨に濡れて光っていた。やがて彼は行きつけの古本屋に入った。わたしはそこで十八世紀の花弁図譜を買った。彼ははしごを立て掛けて、最上段の思想書の一冊を手にとった。店の若い女性が微笑んでいた。年老いた主人と彼は四方山話をした。若い女性は主人の娘ではなく、妻だという。その話を聞いて、幻想作家マルセル・ベアリュを思い出した。この老作家は古本屋の主人でもあり、彼を研究テーマにした女子学生と結婚した。フランスではよくある話である。「貧しかった頃、僕らはよく寒さしのぎにショコラを飲んだものだよ」角のカフェに入って、濡れて冷えたからだをショコラで温めながら彼が言った。彼の奥さんは黙ってうなづいていた。

LXV

レ・アールでヴィム・ヴェンダースの『東京画』を観る。見慣れた東京が、見知らぬ東洋の一都市に見えた。外国人の目を通してとらえた映像のためばかりではない。パリを歩きまわっているこちらの目が変わったのだ。ここではわたしはひとりの東洋人にすぎない。自分が日本人であることを忘れかけている。日本人であることを忘れかけている者の目に、東京はソウルや香港と少しも変らない街に見える。いや、そうではない。わたしが見た東京は、世界に類のない不潔な、矮小な街に見えた。ゴミ箱と汚物がひしめく狭い空間に、汗ばんで脂ぎった小男たちが蝸集している。原口統三が大連から東京に着いたとき、この国の人たちのてのひらは湿っていると言った言葉が、実感として感じられた。ヴェンダースは小津の東京を探し求めているのだが、もちろんそんなものはいまの東京にはない。

LXVI

佐伯祐三がなぜあれほど執拗にパリのアバルトマンの扉を描いたか、分かるような気がする。こちらの建物の入口は「ドア」ではない、「扉」である。少々力では壊れない頑丈な木製の扉である。押して開けるにも腕力がある。無言のまま閉ざされた暗緑色の扉、扉、扉。拒絶の壁。フランス人社会そのままだ。見知らぬ者には絶対に開かれない空間。表札も、もちろん出ていない。見知らぬ者は泥棒である。友人のアバルトマンを訪れたとき、教えられた暗証番号を押して中に入ると、たまたま友人が通路に出ていた。一瞬、彼は警戒したような目つきをした。鋭い眼光だった。わたしだと分かって、いつもの彼の表情に戻ったが、あの目つきは忘れ難かった。

LXVII

わたしが住んでいる十四区の国際大学都市のイタリア館には、韓国女人性が同じ階に住んでいて、共同の台所兼食堂でよくいっしょになる。ある

日、仲のよいポルトガル人女性とともに彼女の部屋にお茶に呼ばれたことがあった。彼女は畳に似た薄い敷物の上に胡座をかいてすわっていて、まわりに並べられた茶器は素焼きの白っぽいもので、なんとなく懐かしい感じがした。この懐かしさはちょっと説明しにくいだが、なんだか上代の日本にいるような、あるいは神道の世界にいるような、そんな感じだった。彼女の着ている白い服も、そのだらりと垂れた白い帯紐も、古い日本を髣髴とさせた。有為転変の末、現代の日本がすっかり失ってしまった古いものを、韓国の文化はまだ守りつづけているといった印象を受けた。だがそれにしても、わたしはなぜ懐かしい感じを受けたのだろう。上代の日本など知りもしないのに。神道の世界に縁のないこのわたしが。

LXVIII

ソルボンヌ広場に面したカフェ。目の前にフランス人の若いカップルがすわっている。学生らしい。女の子がしきりに身振り手振りを交えながら話しているが、相手のほうは本に目を落とししたまま。何をそんなに熱心に読んでいるのか、とのぞいてみると、Gérard Genette の『Figures』だった。二十数年前、博多の旧県庁前の地下の喫茶店で、絶望的な思いでわたしが読んでいた本の一節を女の子に読んで聞かせた。ナルシス・コンプレックスを扱った章だった。ふた昔前の自分の境涯がまざまざと思い浮んだ。こんなカルチエ・ラタン的一角で、青春時代の自分に再会しようとは夢にも思わなかった。読み上げる男の子の声に、女の子は納得したように何度もうなづいた。「これを君はどう思う？」男の子が訊いた。女の子は早口で何か答えていたが、よく聞き取れなかった。秋の氷雨の午後、マロニエの木はもう葉を落しかけていた。

LXIX

フランスに住み、フランス語で生活し、フランス料理を食べる。そんな

中で外国文学としての日本文学を読む。こちらの感性がかなり鍛えられ、鈍麻しているので、微妙なところが伝わってこないのだろうか。理屈では分かっていても、実感できないのだ。フランス語訳の川端康成を読む。

『美しさと哀しみと』。主人公の男性作家の身勝手さばかりが目立つ。ヒロインも線が弱く、貧弱に映る。フランス人には理解できない存在の仕方。こんな小説ではなかったはずなのに。日本の美しさと哀しみが感じられない。これはどういうことなのだろう。フランス語訳のためか。わたしがフランスにいるからか。フランス語で生活しているためか。日本語で読み直して確かめたいと思っているが、まだ日本書店には行っていない。確かめるのが不安でもある。

LXX

あるレストランでフランス人たちと会食した。ル・モンド紙にも書いているというジャーナリスト、美術学校の女性校長、そしてリヨン大学の工学部教授。まだ少壮といった感じのこの教授と文学の話をした。彼は十九世紀において詩人であることの悲惨について語った。具体的な名はあげなかったが、わたしはマラルメやヴェルレーヌを思った。「ユゴーは？」わたしは訊いた。「ユゴーはあらゆる点で例外です。彼はラマルチーヌの時代の詩人です」彼は答えた。ラマルチーヌ時代の詩人とは、詩が社会を動かす実効力をもって、詩人が世論を導くオピニオン・リーダーであった時代に詩人であった、という意味である。資本主義社会になり、ブルジョワが擡頭し、政治・思想から経済・風俗へと世の中が移るにつれて、詩人の存在は忘れ去られていった。ボードレールがそのはじまりである。こういった悲惨な状況は現代においても変わらない、と彼は言った。

LXXI

フォンテーヌブローの駅からタクシーで、セーヌ川をはさんで森の対岸にあるヴァルヴァンの村へ行く。マラルメの別荘は川沿いにあった。二階

の部屋には詩人の遺品が陳列されていて、詩人自身も等身大のパネルとなって立っていた。彼の寝室の窓からセーヌ川をながめる。静かだ。パリに惹かれながらも、パリの喧騒を嫌ってこの田舎に引っ込んだ詩人の気持が、わたしもパリに住んでいるのでよく分かる。フォンテーヌブローの森から飛んできた鳥が川の上で旋回して、「ピエルリー！」(宝石！)と鳴いた。別荘から墓地まで歩く。だらだらの長い下り坂。彼の葬列がおそらく通っただろう寂寞とした田舎道を辿って、墓地に着く。墓地も川べりにあった。彼の墓にはエトルリア風の黒い壺が飾ってあった。墓を撫でる。彼の書物の表紙を撫でるように。

LXXII

マラルメの別荘の前の道を降りて行くと川辺に出る。その水のほとりに一本の柳の木が立っている。マラルメが住んでいた当時から立っていた木である。細長い枝がゆらゆらと揺れ、その向こうで水がきらめいていた。モネの絵を見るようだった。いつまでもここに佇んでいたかった。ちょうどよい川幅の水、ちょうどよい大きさの木、平穏な対岸の森の景色。対岸には友人の神秘主義作家ペラダンの別荘があった。柳のたもとに立っていると、いつしかわたしも故人と一つになるような錯覚を覚えた。

LXXIII

深夜、地下鉄に乗って帰ってくる。部屋に戻って背広を脱ぐと、背中に金髪の髪の毛が一本ついていた。女性の長い髪の毛だった。部屋の明かりにかざしてみると、美しい金色に光った。日本女性の黒い髪の毛よりも細く華奢で、ちょっと引っ張るとすぐにぷつんと切れてしまった。湿度計に使うだけあって、繊細だった。自分はいまパリにいる、という実感がはじめてした。

LXXIV

人の一生は蠟燭の炎にたとえられる。人生を十二分に生き、使命を果たし、天寿を全うした人の炎は、徐々に消えてゆく。これにたいして、自己の才能を發揮し切れず、人生をあきらめ、自己の使命を自ら放棄した人の炎は、突然消える。自殺した人も同じだ。ニルヴァーナとは、「蠟燭の炎が徐々に消える」という意味だ。しかし、このニルヴァーナに達した人は少ない。(中島淳一談。ただし最後の一節は筆者)

LXXV

午前二時。サン＝ミッシェル広場。カフェでカラオケバーの女の子から身の上相談を受ける。東京にいる恋人を捨ててパリにきたけれども恋人が忘れられないという。彼女の目元には傷跡があった。忘れられないと言ったその顔に涙がにじんんでいた。東京に戻って、彼といっしょになるように勧めた。黒いドレスをひるがえして、彼女は迎えにきた男友達とサン＝ミッシェル橋を渡って、シャトレのほうへ歩いていった。その幽霊のようなうしろ姿をわたしは見送っていた。

LXXVI

再びシオランについて。ルーマニア生れのこの哲学者について、日本のある哲学者はこう言った——「希望は何もないが、しかし救われる」この言葉の絶望の深さを知れ。

LXXVII

現代の若者は寂しい。肩を抱いてくれる人がいない。優しい言葉を投げかけてくれる大人がいない。寂しさの極みで、彼らは大人に騙されてゆく。見かけの優しさに。現代の家庭に、父親がいないからだ。現代の若者は寂しい。娘も息子も。社会全体が寂しいのだ。

LXXVIII

目薬をさす。薬といっしょに涙が流れる。

LXXIX

東京で郷土の新聞に誤植を見つけた啄木の悲しみ。誤植だらけの自分の人生。啄木の本当の姿は『一握の砂』などにはない。彼の本当の姿は『悲しき玩具』にこそある。それ以上に、『ローマ字日記』の中に。

LXXX

恋愛は「症状」にすぎない。ナルシズムのなせる業だ。四十すぎてナルシズムがなくなったとき、恋愛がなくなる。「症状」がとれて、あとは死を待つばかり。

LXXXI

パリの夜景でもっとも美しいのは——コンコルド広場だと人は言う。確かにあの夜の照明は宝石のようだ。しかしわたしは、まばゆいコンコルド広場の夜景よりも、ノートル＝ダム寺院前の広場の、数度光を落した、あのしみじみとした夜景を愛す。そこには確かに中世が息づいている。ユゴーの世界がひろがっている。あるいは、ヴィヨンの。世界の終りの光。

LXXXII

夏雲が浮んでいる。刷毛で掃いたような白い雲。抜けるような青空。ああおとそよぐマロニエの葉。置き忘れられたように、シャンポールの城。古城の孤独。何もない空間。見事にすべてが失われている。押し寄せる観光客と無関係に。

LXXXIII

ホテル・ド・ヴィル近くの^{シチズン・ザール}芸術都市のパーティーで知り合った日本人男

性の奥ゆかしい日本語。フランス人を妻としているその男性は、六〇年代から七〇年代の日本語を話していた。レ・アールのビデオテークで見た戦前の映画。小津安二郎の『東京の女』。昨日作ったばかりといった鮮明な映像の中を、若い岡田嘉子があざやかに動いていた。同じ館の一階ホールでは、二、二六事件当時の東京の風景写真展が開かれていた。見事に保存された一連のフィルム。戦前の日本女性が微笑みかけている。古い日本は海外にある。映像も、言葉も、心の動きも。

LXXXIV

サクレ・クール寺院からパリ市街を見下ろしても、逆光になってよく見えない。全体がかすんでわずかにノートル＝ダム寺院の角塔、サン＝クロチルド教会の尖塔、そしてエッフェル塔が見分けられるだけだ。二十世紀に完成したこのバジリカに宗教的意味はまったくない。モンマルトルの丘にそびえる白亜の建造物、それは遠くからながめる見世物的存在にすぎない。白はそのための色であり、夜の照明もそうだ。どこからでもながめられる位置にある。夜は殊更らしく白く浮び上がり、その俗っぽい姿を晒している。ユトリロはこの俗を聖に変えた。アル中の彼自身のように。

LXXXV

冬の午後、ポン・ヌフ橋に佇む。曇り空。寒い。向こうからバトー・ムーシュがやってくる。ガラス張りの客室に日本人の団体観光客が乗っている。橋にさしかかったとき、何人かがわたしにカメラを向け、フラッシュを焚いた。自分がパリの風景の一部になっているのがおかしかった。何ヶ月も街を歩きまわった末に、わたしはとうとう街角の一部になり、パリに溶けってしまったのかと思った。それにしても、日本人が日本人に向けてシャッターを押すとは。日本が遠ざかるように感じられた。

LXXXVI

地下鉄のポスターの貼り替えの手際よさにはいつも感心させられる。豊何豊分もある大きなポスターを、数一つ作らずあつという間に貼ってゆく。壁は緩やかなカーブになっているので、垂直の壁よりも数段難しいはずなのに、苦もなく貼り替えてゆく。人生もあのように容易に貼り替えられるものなら、と思った。しかし、そうなると、人生のポスターは何枚あっても足りないことになるだろう。あるいは、常に一枚のポスターかもしれない。図柄は違っていても、常に同じコピー文字。

LXXXVII

パリにいと知らず知らずに孤独になってゆく。知らず知らずにアル中になってゆく。知らず知らずに——蝕まれてゆく。からだも心も精神も。祝祭の華やかさのその裏で。

LXXXVIII

夏至の音楽祭。街角のあちこちで仮設の舞台が作られ、音楽が鳴り響く。夜通し踊り騒ぐ若者たち。オデオン近くのブッチ通りも歩けないほどの人混みだった。沸き立つ群衆とロックバンドの音。見上げると満月の空。日本で見る月と同じ月。けれどもこちらの心の在り様はずいぶん変った。満月に余情をまったく感じなかった。単なる天体の一つに見えた。石のアバルトマンの上にかかる月は、他人のような素っ気なさで浮んでいた。月はやはり、日本の屋根の向こうに見るべきものだ。騒音にかき消されそうな夏の月。

LXXXIX

教え子の卒業生が添乗員としてパリにやってきた。彼女から電話をもらって、オテル・ニッコーに会いに行った。広い食堂で、日本人観光客が長いテーブルに盛られた海産物料理や肉料理を前にワイワイ騒いでいた。夕

食時間が早すぎて、日本人の他に客はいなかった。わたしも相伴にあずかった。ふと、奥の調理室に目をやると、カウンターの向こうで、パキスタン人がこちらをじっと見つめていた。彼らの一ヶ月分の給料を一晩で食べ尽くそうとしているのだ。

XC

不幸であれば自分たちの仲間、幸福であれば縁のない人間、パリにいれば友人、日本に帰れば他人、パリにいて不幸であれば、これ以上に親近感を覚える友はいない。彼のまわりにはそういう人たちが集まってくる。不幸である人たちに取り囲まれて、彼はこの上なく幸福なのだ。すべて半端なまま生涯を送るべく運命づけられている人たち。

XCI

滞在許可証を得るため、シチ・ユニヴァーシテール国際大学都市のオフィスに各種証明書を提出した。文部省在外研究費の金額を見て、オフィス中の係員が集まってきた。数日後、RERのB線車内で、黒人学生たちがイタリア館にいる日本人の所得の多さのことを噂していた。わたしのことだと思った。三月、家族がヌー・ソールやってきて、半地下の部屋に移って間もない頃、管理人のジャックが、変な男がお前の部屋に入ろうとしていた、マリオを探していると言ったが、俺を見てすぐに逃げた、怪しい奴だ、アラブ人だったと教えてくれた。その話を聞いて、背筋がゾッとした。

XCII

心と精神と魂。男は精神の占める割合がもっとも多く、女は魂の占める割合がもっとも多い。しかし日常生活の大部分は心のレベルで営まれる。心の向こうの精神や魂に触れることはめったにない。とはいえ、男と女の心と心の葛藤には、この精神と魂とがどこかで作用している。合理と不合理と言ってもよい。光と闇と言ってもよい。あるいは、人工と自然。

XCIII

エクスから列車でベルピニャンへ行く。赤茶けた古城の町。夕日がよく似合う。いたるところ古代ローマの面影。それ以上に目につく、カタローニャ王国の遺跡。市庁舎には今でもフランス国旗の上に、青と白のカタローニャ王国の旗が翻っている。ここはもうフランスではない、スペインの一部だ。ところがマドリッドからバルセローナに行ったとき、この国際都市にはもはやスペインの匂いはなく、いたるところ、南フランスの香りがした——果物や魚介類の豊富さ、明るい風光、陽気な人々、自由な空気。同じカタローニャ王国であったのに、同じ青と白の王国旗がはためいているのに、ベルピニャンとバルセローナのこの違い。東から西へ行くと、フランス国内であってもそこはスペインの一部、西から東へ行くと、スペイン領内でもそこは南仏の一部。これは一体どういうことなのだろう。

XCIV

七月のある夕刻。RERのB線サン＝ミッシェル駅の爆弾テロ。わたしが乗った列車の数分あとの列車が爆破された。サン＝ミッシェル駅はよく乗り降りする駅だった。その日は用事が早く済んで、二、三本前の列車で帰ったので危うく難を逃れた。いったん帰宅したあと、すぐB線でシテ島へ行こうとしていたら、友人が駅から戻ってきて、事故でホームはブロックされていると教えてくれた。仕方なくバスに切り換えると、隣に乗り込んだ老人が、ひどいことだ、こんな事はモンパルナス以来だと憤っていた。最初は何が起きたのか分からなかった。バスはリュクサンブールでストップ。歩いて、サン＝ミッシェルのほうへ下って行く。テレビの中継車が出ている。警官だらけ。地下鉄の階段上がり口の例のカフェ「ル・デパール・サン＝ミッシェル」が臨時の救護所になっていて、銀色の包みに覆われた負傷者が運び込まれていた。体温が下がらないようにああして包んでいるんだ、とそばのフランス人が教えてくれた。同じように負傷した乗客が重傷者を運んでいた。連帯の国。それにしても悲惨な光景。犯行声明はま

だ出されていないが、イスラム武装集団（G I A）の仕業と思われる。夏はテロの季節だということをつっかり忘れていた。今まで何事もなかったのが不思議なくらいだ。わたしも油断していた。（後記——その後、エトワール広場、オルセー駅、バスチユ広場、ポール・ロワイヤル駅で爆弾テロが発生。ポール・ロワイヤル駅での爆発はミス。実際は二つ手前のサン＝ミッシェル駅で起こすはずのものであった）

XCV

パリ第十二大学でのセレット教授のゼミ。教授はフランスにおけるヴァレリー研究の第一人者だが、ゼミではフロイトの夢の分析を応用したシユールレアリスム研究を行っていた。そのゼミに何年も通っている中年の韓国人女性がいた。息子と二人でパリに住んでいた。なかなか論文が書けず、将来について悩んでいた。あるとき、学生食堂で一緒に昼食を食べながら話していると、突然彼女は、こういう歌を知っているかと、歌い出しを日本語で口ずさみはじめた。「赤い灯青い灯ともる街角に……」幼い頃、叔父さんと日本に住んでいたときに、叔父さんがよく歌っていた歌だという。わたしはその歌の一番を全曲歌ってやった。彼女は感激し、涙ぐんだ。

XCVI

五月の初め、パリでは白いマロニエの花と桃色がかったうす紫のリラの花が咲きはじめる。粟粒のような小花が房状に咲き立って、ようやく春が訪れる。パリの春にはだまされてはいけませんよ、とある人が教えてくれた。薄曇りの日、雨の日などは気温が下がって、冬に逆戻りするからだ。けれども、街角の店先のあちらこちらにサクランボが盛られる頃、陽ざしにはもう初夏の気配すら感じられ、人々の交わす会話も生き生きとしてくる。サクランボを頬張りながら、甘酸っぱい思いを空に架けてみたくなる午前。わたしはまだパリにいる。